

説教 「主の不可思議を心に納める」 山本 護 牧師
聖書 サムエル記上 17：12～15／ ルカによる福音書 2：8～20

ダビデ王は、イスラエルの諸部族をまとめて統一王国をつくった伝説的な英雄だが、その出自はベツレヘムの一般的な羊飼いであった(サムエル記上 17:15)。

クリスマスの夜、ダビデの町ベツレヘムの郊外で野宿する羊飼�らの暮らしは(ルカ 2:8)、千年前の青年ダビデのそれとほとんど変わらない。

主の天使は羊飼�らに告げる。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである(2:11)」。彼らは「救い主」をどうイメージしたか。

父祖である憧れのダビデ王を想像したであろう。おまけに「天使に天の大軍が加わり、神を讃美した(2:13)」ものだから、軍事や経済の繁栄を期待しただろう。

そんな思いに胸ふくらませ、羊飼�らは「主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか(2:15)」と、真夜中、財産である羊を野に放置して町へ急いだ。

羊飼�らは「マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた(2:16)」。

ダビデの栄光とはまるで違う、貧しい飼葉桶の寝床。寄り添う父と母も素朴で慎ましい。期待外れだ、が、ダビデも生まれた時は貧しかったではないか。

羊飼�らは見た目に惑わされず、主の天使が告げた「民全体に与えられる大きな喜び(2:10)」を素朴に信じて、見たこと聞いたことを脚色なく伝えた(2:17)。

数か月前、マリアの来訪を受けたエリサベトは、己が胎の反応を察知し、聖霊に満たされて堂々と語った(1:41～42)。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう(1:45)」。

羊飼�らもまた「主の御告げは必ず実現する」と信じた幸いな者であった。だがそれを聞いた者の多くは訝しんだ(2:18)。

「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた(2:19)」。聖霊によって救い主を産んだ栄光と不可思議、それが及ぼす言い知れぬ不安と苦難、錯綜する感情や羊飼�との巡り会いなどの諸々を、マリアは「すべて心に納めて、思い巡らしていた」。

ベツレヘムの民にとって、ダビデ王は英雄だが、羊飼�だった青年ダビデには関心が向かない。富や繁栄には心動かされるが、神に素朴に聞き従う生き方には腰が引けてしまう。これは古今東西、似たようなものだろう。

マリアとて、クリスマスの奇跡を理解したわけではないが、「お言葉どおり、この身に成りますように(1:38)」と御心に従うことを優先した。理解や納得は二の次のこと。マリアには謎をそっと抱えていられる、柔らかい強さがあった。十数年後、少年イエスの不可解なふるまいを垣間見た時も、「母はこれらのことをすべて心に納めていた(2:51)」。

善か悪か、義か罪か、救いか滅びか、人は「あれか、これか」を安易に決め、自らを正しき側に置きたがる。だがマリアは違う。

民全体に与えられた救い主の誕生(2:10～11)について、羊飼�のように信じる者がいる反面、多くの者はこれを疑い訝しんだ(2:18)。また現実には、そう単純に二分化できるものでもない。

出来事を中心にいた当のマリアは「すべて心に納めて、思い巡らしていた(2:19)」。そもそも奇跡は、不可思議であるがゆえに奇跡なのだ。私たちが奇跡を、分からないまま「心に納めて」、キリストに従っていく。



《おまけのひとつ》

理解のために 事柄が整理され 位置づけられ、統合される 諸学がそうであるように神学もまた 信仰はいささか違う 口に含んで味わい 心に納め 柔らかく 粘り強く 思い巡らせていること